

「話をしない」と「発音の誤り」とを主訴に入室した エイ君の2回目の指導の中での変化

天童市立津山小学校 梅村正俊

はじめに

エイ君(仮名)は、2回目の指導の中で、全く声を出さない状態から終わり頃には、「ゲームに負けてな」と言う指導者に対して身を乗り出して大きな声で「やんだず!」と拒否するまでに変貌してくれた。さらに3回目の指導では、構音検査の単語絵カード76枚を普通の声で呼称してくれた。そして、この回から構音指導を開始することができた。

本報告では、2回目の指導について『2回目の指導の中で構音検査ができるようになるにはどのような指導者のかかわりが必要だったのか?』について分析し反省したい。

1. エイ君が通級指導を受けることになった経緯

就学時健診の時である。初めはモジモジしてなかなか話してくれなかったが、やっと聞き取れるくらいの囁き声で10種類の絵の名称を言ってくれた。「つみち」「むじわらぼうし」と。発音の誤りは、他にもあり、[キ・ケ・キャ行]が[チ・テ・チャ行]の発音、[ギ・ゲ・ギャ行]が[ヂ・デ・ヂャ行]の発音になっていた。

母親は、発音の誤りよりも、『所属所でお友だちや先生と話をしない』そして『家でも友だちがなく外で遊ばない』ことの方を心配していた。家庭内では元気に遊ぶが、ほとんど会話がないためか、発音に誤りがあることには気づいていなかった。しかし、通級し指導を受けることは、その場で了承してくれた。

2. エイ君についてのいくつかの情報

- (1) 成長及び発達的には問題はない。病歴や現在の病気・疾病にも問題はない。
- (2) 親子4代の家族構成で、しつけ・教育の主体者がはっきりしない。
- (3) すぐ上の兄とは7歳離れており、祖母・曾祖母が初孫のように可愛がっている。
- (4) 園生活では、全く声を出さない。友達がなく、寂しいときは階段の下や物陰に隠れるように縮こまっている。集団活動には、気が向けば保育士付添いでどうにか参加する。

年少から入園した。当初は、登園しても母子分離が困難で慣れるまでに半年を要したが、階段の下や段ボールの中にいることが多かった。遊び相手は保育士だった。

3. エイ君の指導について最初に考えたこと

- (1) 発音の指導は、性格形成の場と考える。

- (2) 従って、子どもからの動作や行動を拾い上げ、それに対応することで、主体的な行動ができ易いようにする。
- (3) 無理な指示の強制はせず、子どもを自由にさせるところから始め、徐々に枠をはめていき、指示の中での活動も充分楽しめるようにする。
- (4) 但し、どの程度の自由さからスタートするかは、初回の指導での来室で、最初に顔を合わせたときの第一印象で決める。

4. 1回目の指導でのエイ君の様子（1回目=初回面接；9月26日）

- 恥ずかしそうにはしているが母親の後に隠れない、手を離せる、正面から担当者の顔を見ることができる、「遊びに行こう」と誘うと母親からすぐ離れ指導者についてきた等々のことから、指導室を個別指導室とした。
- エイ君の動きの模倣を徹底的に行う。エイ君が手を机に上げれば、指導者も手を机に上げる。目を閉じれば目を閉じる。じっとしきれずに自然に身体が動けば、できるだけ同じ動作になるように動く。次第に、指導者がどこまでまねをするのかに興味を持ったのか、自分で工夫し、様々な動きを指導者にさせようとしていた。
- 声は聞かれなかった。「1本橋コチョコチョコ」では、首の下や腋の下をくすぐっても声を出さないように頑張った。「はい・いいえ」は首のサインで行っていた。

5. 2回目の指導でのエイ君の様子（10月24日，T；指導者 C；エイ君）

時間	子どもの様子	指導者の働きかけ
←→；働きかけの方向と強さ， ·····→；指導者の働きかけの切っ掛けになった子供の仕種や動作		
0' 00"	a ノートを頭に載せてニコニコして入ってくる	指導室の中から「こっちだよー」
0' 18"	椅子に座り、ノートを机の上に置く	····→ 「うー、車なんかいっぱいあるぞ」と言いながら、出席シールの箱をCの目の前に出す
0' 27"	出席シールを選び始める	
0' 36"	b シールを取り、Tに視線を向け、小さな囁声で「ねー」	← 「好きなの貼っていいよ」（「ねー」と同時に）
	c 小首をかしげる	
0' 40"	取ったシールを机の上に置き、ニコニコしながら指でいじっている	シールをいじっているのを見ながら、「どこ貼るんだっけー」「どこに貼っていいか、忘れたが？ 覚えたがー」
0' 50"		出席シールの箱を片づける
0' 55"		「さて、貼っていいぞ」
1' 10"		「貼っていいよ」
1' 13"	ノートに右手をかけた後めくろうとする ノートを右手だけで1枚ずつめくる	「ジャーガジャン どこだっけなー 貼んの？」
1' 34"	ニコッとする	めくるのを手伝うようにノートを開きながら、「うー、ジャンケン強いんだっけねー ほら」
2' 11"	ニコッとする	ノートの表紙を出して「おお かぁわいい」
2' 14"		出席シール用カードをCのノートに貼りながら、囁声で「今ね」

2' 40"	返事・うなづきもしないで Tの作業を見ている	囁声で「いーまね、貼るどご作ってあげるからね、ね」
2' 50"	裏になっていたシールを表に 戻して見えるようにしてくれる	さわっているシールを見ながら 囁声で「それ好きなの？ 何だ、見せてごらん」
2' 57"	①ちょっと小首を傾げる	囁声で「好きなの？」「嫌い？」「好き？」「嫌い？」
3' 03"	ほんの小さくうなづく	囁声で「どっち？ 好き？」
3' 15"	無言で視線をTにちらっと向ける	囁声で「うーん そう好きなの？」
3' 15"	無言で視線をTにちらっと向ける	囁声で「そーかー 好きなのかー」
3' 33"	無言で視線をTにちらっと向ける	出席シール用カードをCのノートに貼り終えて、 囁声で「どれ」
3' 38"	無言で視線をTにちらっと向ける	囁声で「この前も来たっけね ねー」
3' 40"	Tの様子を時々見る	指導ファイルに記録用紙を綴じる
4' 28"	Tの指の動きと顔とに視線を向ける	囁声で「O、●、◎、エ、イ」と言いながら出席シール用カードにCの名前を書く
4' 40"	d すぐ貼るり、台紙をその場に置く	囁声で「エイくんここに貼っていいよ！貼る場所を指す 囁声で「貼って」
4' 50"	シールを取ろうとする	囁声で「あとよ、もう一つあげる」シールの 入っている箱をCの前に出す シールの台紙を指しながら「これよーどうする？」
5' 08"	e ゆっくり小さく小首をかしげる 【cより小さい】	囁声で「食べてー」「食べて」「食べてー」
5' 08"	食べるまねをする	囁声で「食べるの」「どうするといいい？」「食べるの？」
5' 15"	小さく首を横に振る	囁声で「違ね」「どうすつといいい？」「ごみ箱ある？」 囁声で「どこにごみ箱あるかな？」
5' 15"	左右を見る	囁声で「どこかなー」
5' 31"	②囁声で「うん」ごみを捨てる	囁声で「あった？」
5' 38"	シールを貼り、台紙をいじっている	囁声で「そうだよー おりこうだねー」 囁声で「あと、もう一個ここに貼っていいよ」
5' 49"	ごみを捨てる	囁声で「食べる？」
《 互いに無言 》		
5' 56"	f 鼻をすすって袖で鼻を拭く	Cのまねをして、鼻をすすって袖で鼻を拭く
5' 59"	g 机からやっど首が出る程度に椅子 から身体をずらし、天上を向く	天上を向く
5' 59"	向き直る	向き直る
5' 59"	天上を向き口を小さく開け 舌で歯茎を舐める	天上を向き口を小さく開け舌で歯茎を舐める
5' 59"	向き直って、軽く口を閉じる	向き直って、軽く口を閉じる
《 互いに顔を見合わせる；3秒 》		

6' 12"	h 口を少し開けるととき「ミャ」 のような音を自分から何回か出す	→ ほとんど同時に「ミャ」のような音を何回か出す その音を「p」に変化させながら音を出し、少しずつ 大きくする、さらに、小さな声で「パパパ……」
	音を出すのをやめる	↙
6' 16"	座り直す	→ 「ウフフ… 面白いことしてんなー」
6' 22"	シールを見る	→ 大きめのシールを出しながら、 「はい、この中に好きな貼っていいよ ほらいっー ばいある どれでもいいよ好きなやつ貼って」
	シールを捜す	→ 「どれ貼るかなー」
	シールを捜し続ける	→ 「んー、見てごらん どれでもいいから」
6' 44"	シールを剥がす前にチラッと	→ 「どれ貼んのかねー」 「ここに貼るんだよ」
7' 03"	Tに視線を走らせる	↙
7' 09"	シールを貼り終える	→ 「よーし」 「貼ったー？」
7' 16"	③「はい」のように口を動かし頷く	→ 囁声で「じゃあ これはしまおー」シールを片づける
7' 50"	すぐにほんの小さくうなづく	→ ノートの前回の記録を見ながら、 「この前丸つけたのねー」
8' 05"	Tの「ねー」に合わせて「ねー」のように 口を動かしほんの小さくうなづく	→ 「エイくん 面白かったんだよねー」
	Tの「ねー」に合わせて「ねー」のように 口を動かしほんの小さくうなづく	→ やや強く「ねー」
8' 13"	1 左手の甲を口に持っていき、 舐めるような仕種をする	→ やや強く「ねー」
8' 16"	左手を机から下ろし、口唇で 「パ」のような音を出し続ける	→ 左手の甲を口に持っていき、舐めるような仕種をする
8' 25"	口唇を吸って「パ」のような 音を2、3回出す	→ 左手を机から下ろし、口唇で音を出す
	j 口唇での音を変化させる	→ 口唇を吸って「パ」のような音を2、3回出す
8' 30"	囁声で「ハー」のような音を出す	→ 口唇での音を変化させる
	囁声で「ハー」のような音を出す	→ 囁声で「ハー」のような音を出す
	囁声で「ハー」のような音を出す	→ 少し大き目の囁声で「ハー」のような音を出す
	《 囁声での「ハー」のやりとりを、その後3回繰り返す 》	
8' 37"	k 少し大き目の囁声「ハー」になる	→ Cの方に身体を少し乗り出すようにして、さらに少し 大き目の囁声で「ハー」のような音を出す
8' 38"	口を閉じる	↙
8' 38"	やや下向き状態からからTを見る	→ やや下向き状態からからCを見る
8' 39"	囁声で「パ」のような音を出す	→ 囁声で「パ」のような音を出す
8' 41"	机の下に顔をやりそこからTを見る	→ 机の下に顔をやりそこからCを見る
8' 45"	机から顔を出す	→ 机から顔を出す
8' 46"	Tの様子を伺うようにしながら 机の下に顔をやる	→ Cの動きに合せながら机の下に顔をやる
8' 49"	Tの様子を伺うようにしながら 机から顔を出す	→ Cの動きに合せながら机から顔を出す
8' 51"	1 顔を出したとき囁声で「ハー」 のような音を出す	→ 囁声で「ハー」のような音を出す

《 口のまねっこと身体のゆらしのまねっこを続ける 》

9' 48"	m Tの足を蹴飛ばす	Cの足を蹴飛ばす
	《 囁声で「パ」のまねっこと蹴飛ばしっこを続ける 》	
11' 03"	n 囁声での「パ」のような音を出したとき唾が飛ぶ …⇒ Cが唾をかけると同時に、Cに唾をかける	「1本橋コーチョコチョコ」(Cの足の裏に)
	《 唾をかけ合う 》	
11' 26"	多めの唾をかける 「ウフフ」声を出して笑う また、多めの唾をかける	ニコニコしながら「やったなーおめえ」 唾をかける
12' 19"	o 身を乗り出して唾をかける	
12' 30"	思わず「プ」と声を出す。その後 無言で指導者を見ている	
13' 30"	無言 (指導者を見ている)	「エーイ君」 机の下や椅子の下に向かって「エーイ君」 ごみ箱の中に向かって「エーイー」 ごみ箱の中を探るように「いないなー」
	p ごみ箱をたたく	
13' 57"	q 小さな声で「パーガ」	「エーイー、あれ、返事がない」
14' 08"	ノートをめくる	《目の前にいるエイを捜し続ける》 《目の前にいるエイを捜し続ける》 机の下を覗いて「エーイー」
	小さな声で「あやややや」	Cの足に触る
14' 55"		
15' 22"	(「ハーハー」言いながら 声を出すのを我慢する) 立って逃げる (離席する)	「1本橋コーチョコチョコ」(Cの足の裏に)
18' 06"	椅子に戻る 机の上に腕を乗せ 頭を上げ寝るような格好をする	寝るような格好をする
18' 55"	うなずく	「ジャンケンすっか？」
19' 38"	大きく首をかしげる	「ジャンケン何回する？」
19' 54"	小さく首をかしげる	「何回する？ 7回？ 3回？ 9回？」 「9回？」
20' 11"	④ 囁声で「10回」	Cの口元に耳を近づけて囁声で「何回する」
21' 35"	青を指さす	「青と水色、どっちいい？」
21' 40"	囁声で「青」	囁声で「あお」
21' 45"	囁声で「下」	「上と下、どっちいい？」
22' 25"	ジャンケンの仕種をする	大きめの囁声で「いくぞー！ ハイ」 大きめの囁声で「聞こえねー」
	A 囁声で「ジャンケン・ボン」 TC一緒に囁声で「アイコデショ」	
	《 1 回 単戈 (ジャンケン10回勝負) 》	

24' 36"	無言	「数えてごらん、(○に指を指しながら) 1、2、」
	囁声で「1」	「聞ーこえませーん」
	囁声で「2、3、4、5」	「1、ハイ」
24' 52"	囁声でTの指の動きに合わせて 再度数える「1、2、3、4、5」	「2」
	囁声で「しゃね」	「じゃあ、先生勝ったのはー？」
	小さくうなづく	「どっち勝ち？ どっち勝ったあー」
		「もう1回する？」
27' 00"	囁声で「1」	対戦の表をノートに書く
	囁声で「2」	「じゃ数えてー」
	囁声で「9」	「1」(と言ってCが数えた後を復唱しながら表に数字を書き入れる)
		「2」(と言ってCが数えた後を復唱しながら表に数字を書き入れる)(3~8までを同様に行う)
		「9」(と言ってCが数えた後を復唱しながら表に数字を書き入れる)
28' 13"	B 囁声で「ジャンケン・ボン」 T C一緒に囁声で「アイコデショ」 囁声で「おしあがり、ジャンケン・お」	
	《 2回 単戈 (ジャンケン9回勝負) 》	
30' 20"	囁声で「ばく」	「どっちだー 勝ったの」
	シールを貼る	勝ったときに貼るシールを出す
31' 00"	囁声で「サッカーボール」 「サッカー」	シールを指して「これ何だー」
31' 23"	r 机に両手を広げて手を上げる	机に両手を広げて手を上げる
31' 25"	音を出したり、軽く唾をかける	音を出したり、軽く唾をかける
31' 33"	s かかってくるように両手を 出してくる	かかっていくように両手を出す
31' 49"	机をTに向かって押す	「ペロペロ」と言いながらくすぐろうとする
32' 09"	t 椅子から下りて机を押しつける	「いでー」「やったなー」
33' 25"	u 身体を斜めにシール一杯押しつける	「やったなー」
33' 49"	押しつけるのを止める	押したり引いたりしながらCが勝つようにする
33' 53"		「どーれ、ゲームすっべはー」「すねの？ すっべー」
34' 06"	⑤普通の声で「する」	「ゲームする？ すーる」(「すーる」をCの返事のように言う)
		「よし、いいよ」
34' 26"	囁声で「しろ」	「エイ君は、なに色が好き？」
	囁声で「しろ」	「ん？」
		「ん？」

35' 10"	囁声で「しろ」	「ん？ しーろ」 「これね、チップって言うの」
35' 17"		「青のチップ、赤のチップ、黄色いチップ、緑のチップ、白のチップ」
35' 27"	⑥小さな声で「チップ」	「いーい、じゃあちよつと言ってごらん、チーップ」
35' 57"	C小さな声で「ジャンケン・ボン」	ジャンケンの仕種をする
	《 ③ 回 単戈 (9個のチップ取り) 》	
36' 28"	⑦小さな声で「ぼく」	「どっち勝ったの」
	囁声で「ぼく」	「ん？」
37' 08"		「ジャンケンで先生ばいじめるー」と泣きまねをする 「じゃ今度負けてけっかや？」
37' 14"	小さく首を振る	「こんど、せんせ 勝つなー エイ負けろな、いいべ、やんだー？」
37' 21"		「やんだがー？」
37' 23"		「負けでいいべー」
	軽く首を振る	「エイ負けんな やんだ？」
37' 31"	軽くうなずく	「聞こえない」
37' 33"		「(Cのまねをして) やんだなんて優しく言う人なんか負けるんだぜ」
37' 35"	⑧ ^{*1} 小さな声で「やんだ」	「やんだ？ 聞こえねぜ」
37' 38"	聞こえないくらいの囁声で「やんだ」	「ありや 言ったなー 負けろ！」
37' 42"	^{*1} よりもやや大きな声で「 ^{*2} やんだ！」	「言ったなー 負けろ！」
37' 47"	^{*2} よりもやや大きな声で「 ^{*3} やんだ！」	
37' 49"	^{*3} よりもやや大きな声で「 ^{*4} やんだ！」	
	《 T「負けろ！」 C「やんだ」を繰り返す 》	
37' 59"	「やんだず！」	「負けろず」
	《 Cの声 ⇒ だんだん大きくなっていく 》	
38' 16"	⑨身を乗り出して大声で「やんだず！」	無言
	無言	「こんど負けてけるんだよね」(普通の声で)
40' 16"		《 再度、C「やんだず」 T「負けでね」の繰り返し 》
40' 33"	D「さいしょはゲー、ジャンケン・ボン」	
	《 4 回 単戈 (7個のチップ取り) 》	
41' 29"	⑩3回戦の時よりも大きな声で「ぼく」	「どっち勝ち」
	【 田各 】	
43' 25"	退室する	

6. 2回目の指導の指導分析

右の図は、2回目の指導の概略を『ことば及び動作』について『意思表示の大きさ』の観点から7段階に評価したものである。評価は、2回目の指導の中で、最も意思表示が弱かった場面を『評価0』とし、最も強かった場面を『評価7』とした。それぞれの評価の基準は、図の中に示した。

逐語録及び右の図を参考にしながら『2回目の指導の中で構音検査ができるようになるにはどのような指導者のかかわりが必要だったのか?』の観点から問題点を拾い上げ反省したい。

《問題点1：1回目の指導時のエイ君の印象を

過信し指導を開始してしまったこと》

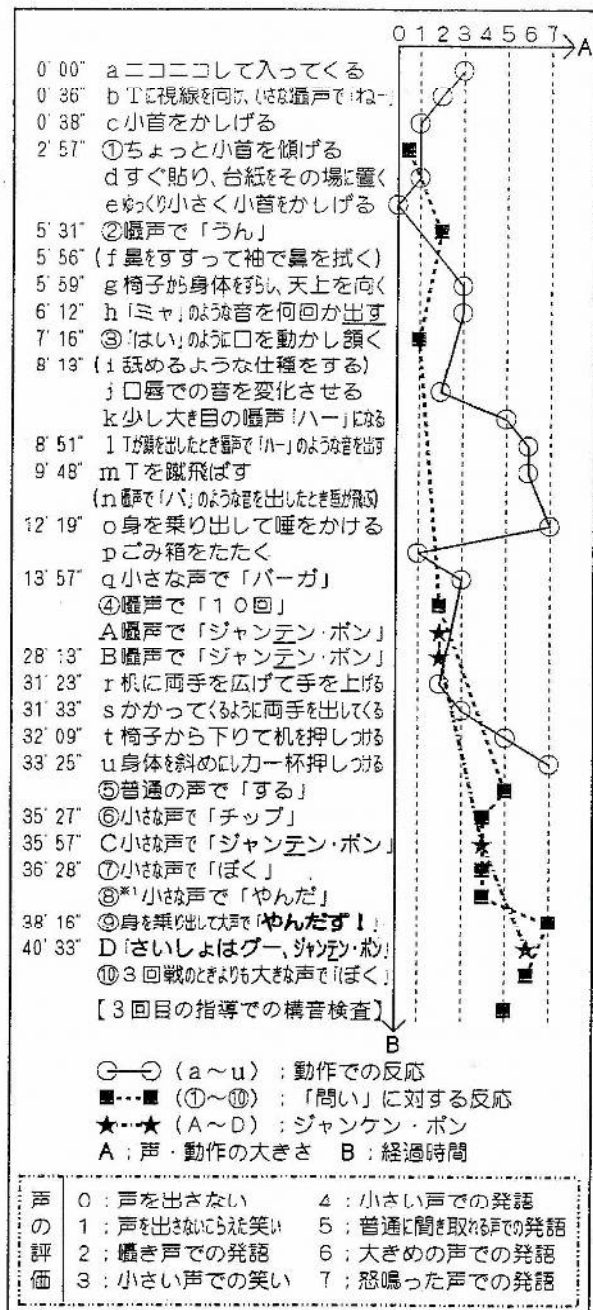
シールを選んだもののどこに貼るのかわからず小さな囁き声で「ねー」(b)と指導者に視線を向け問いかけてきたとき、それに被せるように「貼っていいよ」と声をかけてしまった。

これは、ノートに頭を載せてニコニコして指導室に入ってきた(a)ことを、前回の指導から約1ヶ月間のブランクがあるにもかかわらず前回の指導の楽しさがまだ維持されているものとエイ君の表情の理解を誤ってしまい、普通に応答ができる子に対するのと同じ話かけや指示をしてしまった結果である。

前回同様、エイ君の表情や仕種を注意深く観察しながらそれに見合った対応を丁寧にとろうと考えていたら、エイ君の発語に被せる

ことなく「なあに?」とか「どうしたの?」という言葉かけになっていたろう。これは、エイ君からの自発的な発語での応答の機会を無にしてしまった対応だった。

さらに、0分36秒から2分14秒までの対応は、エイ君の何に働きかけているのかがはっきりしない。これは、指導者が出席シール用カードをまだエイ君のノートに貼っていなかったことを忘れていたという大きなミスのために、指導者はシールを貼ることを要求し、



《 2回目の指導の流れ 》

エイ君はシールを選択したもののどうすればよいのか分からないという状態になっていた。出席シール用カードがないことに気がつきノートの表紙を「おお かぁわいい」と誉め取り繕ったり、指導者も囁き声にして（2分14秒から）語気を和らげてはみたものの後の祭りで、指導者の働きかけに対するエイ君の反応は弱まる一方だった。

「好きなの貼っていいよ」との指導者の指示（0分36秒）には、すぐに小首をかしげたが、貼り終わったシールの台紙（ごみ）を指して「これよ—どうする？」との問いには、ゆっくり小さく自信なげに小首をかしげていた。

にもかかわらず指導者の心の奥底にまだ『前回楽しかったのだから多少無理させても関係は切れないだろう』との願望があったのだろう、指導者の「（ごみ箱）あった」に対して囁き声で「うん」（5分31秒）と返事をしてくれたものの、5分8秒から5分56秒までのかかわりでも、さらにエイ君に追い討ちをかけることとなった。

従って、エイ君の『意のまま』を大切にし、シールを貼るやりとりを簡単に済ますか無くしていれば（0分18秒から5分56秒）、約5分は早く、エイ君を主体とする動作のまねっこに入れていたはずだった。

《問題点2；指導者を操作して楽しむことを十分にさせないままエイ君に変化を求めたこと》

ごみを捨てた（5分49秒）後黙っていると偶然鼻をすすって袖で鼻を拭く（5分56秒）。この仕種を指導者がすかさずまねると、前回のことを思い出したのか、自分から天上を向き指導者が天上を向くとすかさず向き直る、指導者が向き直るとすかさず舌で歯茎を舐める、指導者が歯茎を舐めとすかさず口を閉じるというように指導者に自分と同じ仕種をさせ楽しみ始めた。

指導者にまねさせようとした「ミャ」の様な音のまねをしている（3、4秒）うちに指導者に『音を変えたらエイ君は変えるだろうか？』との欲望、そして、ここでも前回の印象を引きずった『変えてくれるんじゃないか』との期待が芽生え、「ミャ」と同じ構音点になる[p]を出し、さらに「パ」に変化させた。

エイ君は、指導者のそんな邪念を見透かし、音を出すのを止め居住まいを正してしまった（6分16秒）。そして、5分31秒には囁き声で「うん」と返事をしてくれたにもかかわらず、8分5秒での「エイ君、面白かったんだよねー」の問いかけには、指導者の「ねー」だけを、しかも口を微かに動かすだけの返事をしただけだった。

エイ君の『為すがまま』を受け入れ、あくまでも変化の切っ掛けをエイ君の仕種（5分56秒）に徹していれば、指導者を操作する（自分のまねをさせる）意欲を低減させることなく前回の行為（8分13秒）に、約2分は早く入れていたはずで、ここまでで計約7分を無駄にしたことになった。

《問題点3：「エイ君」と呼べば、ことばで返事をしてくれるだろうと錯覚したこと》

指導者に唾をかけた後、思わず「プッ」と声が出てしまった（12分30秒）ことに自分で驚いたのか唾をかけるのをやめてしまう。そして沈黙。

指導者を蹴飛ばす行為に出た（9分48秒）こと、身を乗り出して指導者に唾をかけた（12分19秒）こと、そして沈黙の状態でも指導者の方を向いていた（12分30秒）ことから、『今までなら、これらの行動に出られるようになった子は普通の声で返事をしてくれた。だからエイ君も呼べば何らかの方法で返事をしてくれるだろう』と指導者に邪念が生じた結果、『思わず声が出てしまったことに自分で驚き沈黙してしまう子が返事をするはずはない。』との思いに至らなかった。

沈黙した時点で「エイ君強い！ 強いなあ！」と指導者に身を乗り出して向かってきたことを誉め、独言のように「だからこの前ゲームで先生から勝ったんだ。今日も先生負けっかもしないなあ」と言いながら「ジャンケンゲームする？」とゲームへ移行すれば、身を乗り出して指導者に唾をかける気持ちの昂揚を維持したままゲームを展開できたと思われる。従って、結果的に問題点4も回避できたものと思われる。

《問題点4：ことばでの返事をさせることにこだわったこと》

1回目の「エイ君」の呼びかけ（13分30秒）には、案の定返事はなかった。そこで、定番であるが机の下に向かって「エイ君」、返事なし。ごみ箱を持ち上げ、中に向かって「エイー」「いないなー」。それまで指導者の仕種を見て「何やってんだろうこの人は。変なおじさん」というように嬉しそうにニコニコしながら見ていたエイ君が、ごみ箱の底を素早く叩くとスッと手を引っ込め、何事もなかったような仕種をした。

問題点3に気づくことなく「エイ君」と呼びかけたとしても、呼びかけに対して『底を叩く』というエイ君なりの方法で返事をしてくれたわけだから、指導者の要求水準を下げ、ここで「あーあ よかったあー いた」と対応していれば、小さな声での「ばーか」の出現もなく、小さな声で言えたのだから、せめて囁き声での「はい」だけでも出るまで頑張ろうとこだわることもなかった。

問題点3（12分30秒）にその瞬間に気づき、問題点4（18分6秒まで）が回避できていれば、ここで約5分30秒の無駄をしないで済んだはずである。ここまでの無駄を合計すると、計約12分30秒を無駄に過ごしたということになる。

この時間は、72単語の絵カードでの構音検査（年長の子で、順々に呼称してくれれば約3～4分必要）を行うには十分すぎるほどの時間になった。

《問題点5：まだまだ続く音声へのこだわり》

ゲームの再開を促すために、ゲームをするかしないかの判断をエイ君に求め、返事がしやすいように、「ゲームする？ すーる」と「すーる」をエイ君の返事になるようなイン

トネーションで質問した（34分6秒）ところ、初めて音声での返事が返ってきた。そこで、エイ君が使用するポーカーチップの色を言わせるようにした（34分26秒）が、囁き声の「しろ」になってしまった。そして、指導者は、「ん？」「ん？」と追い討ちをかけた。

さらに、3回戦が終わって勝敗をエイ君に言わせる（36分28秒）。1回目は、「ぼく」と小さな声で返事をしたが、ここでも指導者が「ん？」と聞き返したところ、結局囁き声での「ぼく」になってしまった。

《問題点6：自己反省の限界》

自分の指導を自分で反省するということは、指導自体が主観によって進められていることから客観的に反省することには限界があり、見逃している問題点は数限りなく存在するだろう。

7. その後の経過（母親の話や記録から）

3回目（11/7, 指導内容：絵カード呼称構音検査、単語復唱ディープテスト、

じゃんけんゲーム）

担任の先生への朝と帰りの挨拶は、ぼそぼそではあるが今までもできた。他の先生には、うつむいてしたことが無かったのが、他の先生から「初めて挨拶してもらった。感激！」と言う話を今日いただいた。

どこかに行こうと言うと、すぐ「いやだ！なに買ってくれる？」と言って出かけようとしな。ことばの教室には、前の日から行くのを楽しみにしている。

5回目（11/28, 指導内容：じゃんけんゲーム、[ke]の音節）

エイ君と同じクラスの子の母親から、「エイ君、大きな声出してしゃべっているね。」と言われた。自分の教室だと大きい声出しているみたいだけど、他の教室に行くときまだ小さいみたい。「友だちとも元気に一緒に遊んでいるね。」とも言われた。

6回目（12/12, 指導内容：園の話、[ke] 2～3回続けて言える）

最近の家での様子…母の手紙から【12/12受】

- ・積極的に遊ぶようになった。例えば、園から帰るとすぐ友だちの家へ行く。
- ・園で友だち（近所の年下の子）と遊ぶ約束をしてくる。
- ・何気ない会話の中に、園での友だちとの様子を見ることができることがある。前だと、全然と言っていいほど話さなかつたし、聞いてもそっぽを向くだけだった。
- ・（園の担任の手紙）先生にお世話になって約1ヶ月半、担任以外の先生たちにも「おはようございます」と挨拶できたことを知り大きな変化とうれしく思っています。

7回目（1/9, 指導内容：お年玉の話、[ke]音節）

休み中、すごく赤ちゃん言葉が気になった。その度に「また赤ちゃんことばになったよ。」と注意してきた。言われることを嫌がったからかなー？「今日、行きたくない。」と本人が言った。でも、無理矢理連れてきたわけじゃない。

8回目（1/16, 指導内容：好きな食べ物の話、[ke]単語の語頭・語尾）

エイ君とTが話をしながら水飲みに来たときの会話を聞いて、「先生と家みたいに話

をするんですね。家でもあ一言うんです。」

(エイ君がノートとセーターを持たないで帰ろうとする)「ほら、ノー……」(ノートと言いかけて、Tの顔を見るなり、アッと気づいたように舌をペロツと出して言うのを止める)「言わなきゃと(まだ)思っているんですねえ」と一言。

12回目(3/18, 指導内容: 園及び家庭の話、[ki・gi]単語・文節)

「最近、自分でわかるのか、ギユウとかキヤアとか練習しているみたい。」「言ったわけでもないのに……(言い訳のように言う)」

13回目(4/22, 指導内容: 学校の話、単語・短文復唱ディープテスト及び会話⇒

誤り認められず)

学校から帰ってから、友だちと外に遊びに行く。学校で約束してくるみたい。自分から他の子の家に行くし、他の子を家に呼んでくる。

《家庭訪問での学級担任からの話: 小さい声だが、「元気です。」「おはようございます。」など言う。必要なことは、小さい声だが、みんなの前で話す。》

14回目(終了; 4/30, 指導を終了しての母親の感想文…原文のまま)

就学時健康診断の時に、発音に問題があると言われ、ことばの教室に通級することになりました。

発音も心配でしたが、その頃の私は、子どもの極端な人見知りの方がずっと心配の種だったのです。家では大声で話すのに、人前に出ると全然声が出ず、私の後ろに隠れてしまうような子でした。そんな性格を直すことから、先生は始めて下さったように思います。まず私が注意されたのは「口を出さないこと」。私は子どもを信用して、出来るだけひとりでやらせることに努めました。

ことばの教室も回を重ねる度に、先生とも仲良くなり、発音も自分なりに自覚して治そうとしているのが見えました。また、ことばの教室で使用したスケッチブックには、ぎっしりと絵やゲームの内容が記載されており、充実した指導が想像されました。

小学校に入学しましたが、たくさん友だちもでき、学校の先生には、「声は小さいけど、きちんと答えてくれますよ。」と言われ、喜んでいるところです。

8. おわりに

『2回目の指導の中で構音検査ができるようになるにはどのような指導者のかかわりが必要だったのか?』の観点から自己反省として6つの問題点を拾い上げた。

子どものちょっとした仕種や行為の意味を読み取り、それに素早く対応することはやはり難しい。しかし、どんな子供の指導であっても、これは避けて通れるものではない。

それだけに自分の指導をどれだけ厳しく自己評価し反省できるかが問題となる。そしてそのことが、次にかかわる子供に対して更に良い指導を行う必要条件となるのだろう。

今回の自己評価がどれだけ厳しい反省になっているかは疑問が残る。自己評価の基準が明確でないからである。だから『これで良いという指導はない』からまずは出発しよう。